

2015年度事業報告書

2015年 5月 1日から 2016年 4月 30日まで

特定非営利活動法人ケアリングフォーザフューチャーファンデーションジャパン（CFFジャパン）

1 事業の成果

① -a海外での開発教育等を活用した青年育成事業

2015年度も、フィリピン・マレーシアにおけるワークキャンプ、スタディツアー、ハッピー「子ども」キャンプを実施し、2014年度から開始したミャンマースタディキャンプも3回目の開催を迎えた。年間を通して合計16プログラムを実施、過去最多の計353名の参加者を現地に派遣することができた。参加者数は2013年春シーズンより3年連続で増加しており、主に大学生を中心とした「世界の子どもたちの支援を通じた青年育成」へのニーズの高まりが感じられる。フィリピンでは「子どもの家」修繕作業に加え、周辺地域において水路の補強や石垣作りを、マレーシアでは「子どもの家」の整備作業を、ミャンマーにおいては貧困地域に住む子どもたちに向けた演劇活動を、各国の青年と日本の青年が協働して取組んだ。

ミャンマー事業においては現地の急激な物価上昇や団体内のディレクターを担える人材の確保がプログラム継続における課題点となっていたが、現地パートナー団体の事業への理解と協力関係が深まったことで、安定的なプログラム開催が実現するようになってきた。

プログラムリーダーを対象とした「リーダーシップトレーニング合宿」では、これまで団体職員がそのトレーニングの全てを担ってきたが、今年度は団体としてもより幅広い青年育成の視野を持つことを目的に、外部講師も取り入れて実施した。グループの力を生かした体験学習を通して、青年たちが集団の中で自身の存在や役割、他者との協働を考える機会となるよう試みた。

① -b 海外での開発教育等を活用した青年育成事業-教育機関との協働事業-

<順天高校との協働事業>

文科省のスーパーグローバルハイスクール（SGH）指定校の順天高校との協働において、フィリピンフィールドワークを担当。学校側との企画運営会議の他、SGH対象クラスの生徒に向けたワークショップやフィールドワーク派遣生12名の課題研究に対するグループ別アドバイス、事前事後の個別サポートを行った。現地では、フィリピンの貧困地域で生活する人々へのインタビュー、農村部の子どもたちに向けた衛生プログラム実施における現地調整やサポートを担当。企画から実施までを生徒たち自身に担ってもらえるようサポートすることで、目の前の社会課題に対する関心の高まりが見られたこと、現地パートナーとの協働の重要性に気付いた生徒がいたことは、グローバル人材の育成という趣旨にかなったプログラム展開ができたことと評価できる。今後は、それぞれの生徒が現場で得た思いをいかにその後の学びに繋げていくサポートができるかを、高校側と検討し実施していく。

<桜美林大学との合同プログラム>

前年度に引き続き、当団体プログラム一般参加者と桜美林大学生の混合プログラムとして、マレーシアでワークキャンプを実施した。大学が求める現地理解や社会課題（貧困・格差など）への知識を深めるという要素を取り入れるため、桜美林大学からの参加者9名にはキャンプ前の3日間で事前学習プログラムを実施した。事前学習プログラム自体は意義のある活動だったものの、その後の一般参加者との通常キャンプにおいて、一般参加者とのプログラムに対する意識の差が露呈された。キャンプが一つの集団として寝食のみならず学びも共にする場合、全体のゴールを見据えた環境設定を吟味する必要がある、次回以降の改善課題である。

②「子どもの家」支援等を通じた国際協力事業

＜CFFインターナショナルコンベンションの開催＞

CFFフィリピン・マレーシア・ジャパンの理事が一同に会する「CFFインターナショナルコンベンション」を東京にて開催。チャイルドケアサポーターや大口寄付者、関係機関を招き、「子どもの家」や事業報告を中心としたオープンフォーラムを実施した。各国理事に日本における青年活動の現場に触れてもらうことで、CFFジャパンの青年育成事業への理解と協働組織としての協力を仰ぐことができた。各国CFFの課題を共有・協議し合意した事項に関しては、3ヶ国が協力して2年後までの解決を目指すこととなった。

＜障がい児親の会の来日ツアー受け入れ＞

CFFフィリピンが支援する現地障がい児親の会メンバー6名の日本視察の受け入れを行った。障がい児者施設、職業訓練施設、親の会メンバーとの交流、特例子会社訪問を通し、フィリピンにおける障がい児親の会による自立支援事業立案のサポートを行った。

＜海外の子ども支援＞

現地の子どもの支援に関しては、CFFジャパン自体が事業主体になること、現地の子どもの直接支援をすることよりも、現地の子どもたちは現地法人を始め地域の力によって育てられるようになることを目指し、「海外の子ども支援にあたっての協働指針」を制定した。本指針を各国理事と共有し、理念を共有することにより、

- 1、厳しい立場に置かれた子どもの最善の利益を第一に考えること
- 2、現地のカウンターパートの主体性を尊重し、ともに「自立」を目指すことを基に海外の子ども支援を展開していくことが明確になった。

③国内での国際協力・青年育成等の啓発・推進事業

2015年度は、グローバルフェスティバル、よこはま国際フェスティバル、ワンワールドフェスティバル（大阪）・アースデイ東京の出展の他、地方チームが主体となってアースデイ名古屋にも初出展をし、ブースにてキャンプ・ツアーの説明会や、展示を通して現地の現状や団体の取り組みを紹介した。

今年度は、「自分と向き合い、社会の課題に目を向け、行動するきっかけを創る」ことを目的とした新たな国内活動チームも発足し、国内活動の活性化に繋がるとともに活動の幅も広がった。

＜2015年度の青年活動チーム（国内活動チーム）＞

- ◎CFF運営委員会
- ◎キャンプ・スタディツアー実行委員会（春・夏期）
- ◎ハッピートレードチーム（フェアトレードチーム）
- ◎マレーチルドレンプロジェクト（マレーシアにおける貧困移民児童の支援活動）
- ◎マンゴー'S（野球チーム）
- ◎CFF FC(フットサルチーム)
- ◎東松島市復興支援活動チーム
- ◎大塚大学（学びの場の企画運営）
- ◎地方チーム（関西、北海道、四国等）
- ◎大学チーム（東洋、成蹊、日大国際等）

④その他：組織運営について

＜中長期計画の策定＞

2013年度にミッションが明文化されたものの、実際の事業活動におけるビジョンが不明瞭であることやプログラム参加者層の変化を受け、本年度はミッションを具現化するためのビジョン策定と、そのビジョン達成に向けた中長期計画策定に力を入れた。大学生・社会人1～10年目の各層の過去プログラム参加者を対象としたインタビューや、他団体へのヒアリングを実施。3ヶ月に渡る中長期計画策定支援プログラムにも参加し、当団体のビジョンを下記の通り仮定義した。

「青年が世界・社会の課題を自分事として捉え、その解決の担い手となれるような育ち合いの場を創る。」

この取り組みを基に中長期計画を検討し、今後は、既存の海外ボランティアプログラムに加え、教育機関との協働事業とサポーター制度の拡大を目指すことが重要取組事項として挙げられた。

<CFFサポーター制度>

上記の中長期計画や海外の子ども支援にあたっての協働指針を基に、既存のチャイルドケアサポーターと会員制度を統合し、新たな「CFFサポーター制度」を発足することとなった。これまでのフィリピン・マレーシアの子ども支援に焦点を当てたマンスリーサポーター制度から、ミャンマーの子どもや日本の青年育成事業も支援対象とした新たなマンスリーサポート制度の確立に向けて定期的な会議と実施に向けた準備を進めている。

2. 事業の実施に関する事項
 (1) 特定非営利活動に係る事業

事業名	事業内容	実施回数	実施場所	従事者の人数	受益対象者の範囲及び人数	事業費の金額(千円)
①-a海外での開発教育等を活用した青年育成事業	フィリピンワークキャンプ	5回	フィリピン	2名	日本人122名+現地人	12,632
	フィリピンハッピーキャンプ	1回	フィリピン	1名	日本人19名+現地人	
	フィリピンスタディツアー	2回	フィリピン	1名	日本人37名	
	マレーシアワークキャンプ	2回	マレーシア	2名	日本人112名+現地人	
	マレーシアスタディツアー	2回	マレーシア	1名	日本人45名	
	ミャンマースタディキャンプ	1回	ミャンマー	1名	日本人18名+現地人	
①-b 海外での開発教育等を活用した青年育成事業 -教育機関との協働事業-	順天高校協働事業	通年	フィリピン	3名	日本人60名	
②「子どもの家」支援等を通じた国際協力事業	フィリピン「子どもの家」支援	通年	フィリピン	3名	入所児童+周辺地域	751
	マレーシア「子どもの家」支援	通年	マレーシア	3名	入所児童+周辺地域	
③国内での国際協力・青年育成等の啓発・推進事業	イベントへの出展・活動紹介の支援	2回	都内周辺および関西	のべ約80名	不特定多数 一般	11
	フェアトレード商品等の販売の支援 よりみち大学	4回	都内周辺	のべ5名	会員および一般約50名	

(2) その他の事業：特になし